

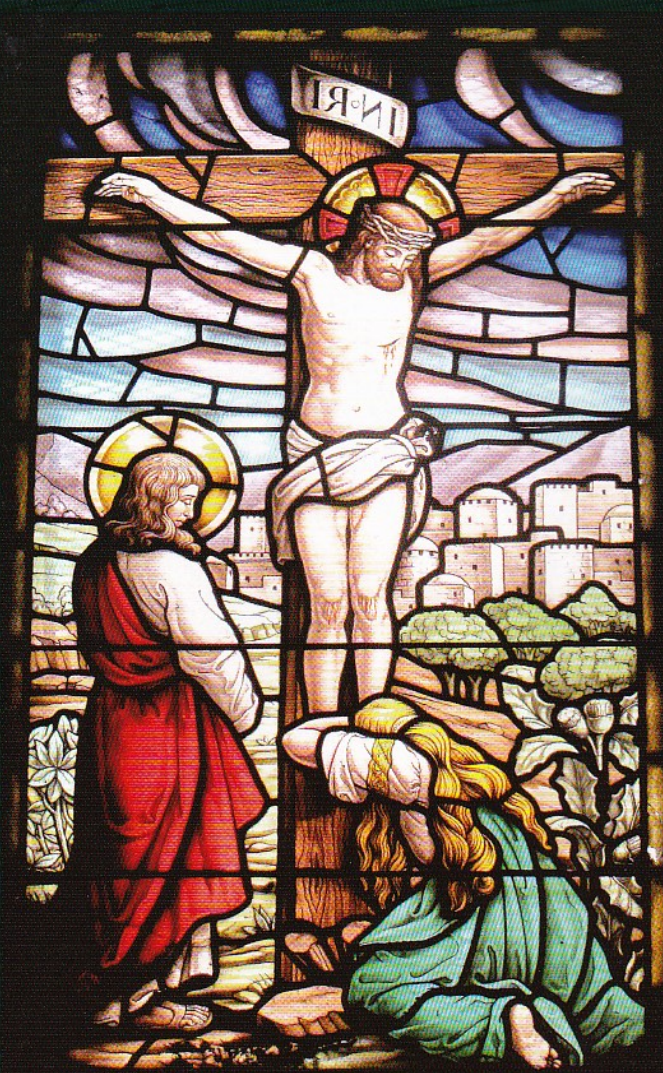
いわぎんスペシャル

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 40 周年記念演奏会

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ作曲

ヨハネ受難曲

BWV245 (第4稿)



■ 主 催	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
■ 特別協賛	🏦 岩手銀行
■ 助 成	第5回ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞
■ 後 援	岩手県教育委員会, 盛岡市教育委員会, 盛岡市文化振興事業団, 岩手県合唱連盟, 岩手日独協会

ご あ い さ つ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

副代表 兼 40周年記念演奏会実行委員会チーフマネジャー

赤塚 貴史

本日は、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン40周年記念演奏会 バッハ作曲『ヨハネ受難曲』演奏会にお運びくださいます、まことにありがとうございます。

当会は1977年2月にカンタータを歌う会として発足しました。翌年、現名称に変更し、“《言葉が生きる》と《音楽が生きる》とは歌の世界では同義語である”という音楽信条を掲げ、音楽の父ヨハン・ゼバスティアン・バッハを中心とする合唱曲の研究と演奏を今日まで続けてきました。盛岡での演奏会だけでなく、本場ドイツでの演奏、世界的な音楽家との共演も果たすなど、アマチュア合唱団としては誠に恵まれた活動が続けることができました。これもひとえに、関係者をはじめとする皆さま方のご理解とご協力がなければなし得なかったことです。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

今回、当会40周年の節目の演奏会にバッハの代表作、『ヨハネ受難曲（第4稿／1749年）』を選曲しました。イエス・キリストの受難を扱うこの作品は、人の心に潜む光と闇、神の子イエスの威厳と優しさ等、様々な対称構造が音楽で見事に表現されており、まるで緻密な計算の下に築き上げられた建築物のよう。作曲されてから今日まで約270年近く、古今東西、多くの人々によって歌い継がれてきた名曲です。当会はこの1年間じっくり練習に取り組み、ついに本日、13名からなる当会出身の声楽ソリスト、一流の演奏家20名からなる東京バッハ・カンタータ・アンサンブルの皆様、そして音楽監督・指揮者である佐々木正利先生の指揮の下、この名曲を演奏します。日本語の字幕も用意いたしました。その成果をぜひ皆さまに堪能していただければ幸いです。

本日の演奏会企画実現のため、今回も多くの方からご協力を頂きました。また、企画趣旨が認められ、公益財団法人サントリー芸術財団から、第5回ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞を受賞する栄誉に浴することができました。加えて、株式会社岩手銀行から特別協賛を頂きました。改めて身の引き締まる思いです。会員一同、心より感謝いたします。

本日は、音楽が備える“喜び、癒やし、前に向かう力”を最後までじっくりとお楽しみください。

40 周年記念演奏会 《ヨハネ受難曲》

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ／ヨハネ受難曲 BWV245 (第4稿)

独 唱

福音史家：及川 豊 / テノール
鏡 貴之 / テノール
イエス役：小原 浄二 / バス
ペテロ役：淡野 太郎 / バス
ピラト役：佐々木直樹 / バス

藤崎 美苗 / ソプラノ
村元 彩夏 / ソプラノ
金成 佳枝 / ソプラノ
小原 伸枝 / アルト
谷地畝晶子 / アルト
鳥海 寮 / テノール
西野 真史 / テノール
沼田 臣矢 / テノール

管弦楽

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル
(コンサートマスター：蒲生克郷)

合 唱

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

指 揮

佐々木正利

2017年 3月20日(月)14:00開演

盛岡市民文化ホール (マリオス) 大ホール

主催 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

特別協賛 岩手銀行

助成 第5回ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞

公益財団法人サントリー芸術財団による「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金」の助成「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞」は、東日本大震災を機に、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とサントリーホールディングス(株)からの寄付をもとに、公益財団法人サントリー芸術財団に設立された基金の助成事業です。クラシック音楽を主体とする演奏活動・音楽普及活動等が対象の応募制で、音楽を通じ被災地または日本全体に活力を与え続けたい願いから2012年から10年間行います。

<http://suntory.jp/fund/>

後援 岩手県教育委員会 盛岡市教育委員会 盛岡市文化振興事業団 岩手県合唱連盟 岩手日独協会

曲 目

Erster Teil (第1部)

福音史家：及川 豊 / イエス：小原 浄二 / ペテロ：淡野 太郎
下女：金成 佳枝 / 下役：沼田 臣矢

1. Chor: Herr, unser Herrscher, dessen Ruhm In allen Landen herrlich ist!
合唱「主よ、私たちの支配者よ、あなたの栄誉は地の全域で輝いています！」
< Gefangennehmung Jesu > «イエスの捕縛»
2. Bibeltext: Jesus ging mit seinen Jüngern über den Bach Kidron
聖句「イエスは弟子たちとキドロン川を渡って園に入った」
3. Choral: O große Lieb, o lieb ohn alle Maße
コラール「ああ 大いなる愛 どんな考えも超えた愛」
4. Bibeltext: Auf daß das Wort erfüllet würde, welches er sagte
聖句「それは、イエスが語ったこの言葉が成就するためであった」
5. Choral: Dein Will gescheh, Herr Gott, zugleich
コラール「主なる神よ、天の国と同じように」
6. Bibeltext: Die Schar aber und der Oberhauptmann
聖句「ユダヤ人の兵士、隊長と従者たちは」
7. Arie (Alt): Von den Stricken meiner Sünden
アリア（アルト：小原 伸枝）「罪の束縛から私を解き放つために」
< Des Petrus Verleugnung > «ペテロの否認»
8. Bibeltext: Simon Petrus aber folgte Jesu nach und ein ander Jünger.
聖句「シモン・ペテロともう一人の弟子はイエスの後について行った」
9. Arie (Sopran): Ich folge dir gleichfalls mit freudigen Schritten
アリア（ソプラノ：藤崎 美苗）「私もまた喜びの足取りであなたについていきます」
10. Bibeltext: Derselbige Jünger war dem Hohenpriester bekannt
聖句「もう一人の方の弟子は大祭司の知人であった」
11. Choral: Wer hat dich so geschlagen
コラール「誰があなたを打ったのですか？」
12. Bibeltext: Und Hannas sandte ihn gebunden
聖句「アンナスはイエスを縛って」
13. Arie (Tenor): Ach, mein Sinn
アリア（テノール：西野 真史）「ああ、私の本性よ」
14. Choral: Petrus, der nicht denkt zurück
コラール「ペテロは主の言葉を思い起こさず」

Zweiter Teil (第2部)

福音史家：鏡 貴之 / イエス：小原 浄二 / ピラト：佐々木直樹

15. Choral: Christus, der uns selig macht
コラール「私たちを幸せにするキリストは」
< Verhör vor Pilatus > «ピラトの訊問»
16. Bibeltext: Da führten sie Jesum von Kaiphas vor das Richthaus
聖句「イエスが総督官邸に着いたとき」
17. Choral: Ach großer König, groß zu allen Zeiten
コラール「ああ いついかなるときにも 偉大な王よ」
18. Bibeltext: Da sprach Pilatus zu ihm
聖句「ピラトはイエスに言った」

19. Arioso (Baß):Betrachte, meine Seel, mit ängstlichem Vergnügen

アリオージョ (バス：淡野 太郎) 「よく見つめよ、わが魂よ、不安を含んだ嬉しさと」

20. Arie (Tenor):Mein Jesu,ach!

アリア (テノール：鳥海 寮) 「私のイエスよ、ああ！」

< Verurteilung > «判決»

21. Bibeltext:Und die Kriegsknechte flochten eine Krone von Dornen

聖句「兵士たちはイエスの頭に茨で編んだ冠をかぶせ」

22. Choral:Durch dein Gefängnis, Gottes Sohn

コラール「神の子よ、あなたが囚われたことで」

23. Bibeltext:Die Jüden aber schrieen und sprachen

聖句「しかし、ユダヤ人たちは叫んだ」

24. Arie (Baß) und Chor:Eilt, ihr angefochtenen Seelen

アリア (バス：佐々木直樹) と合唱「急げ 悩みに満ちた魂よ」

< Kreuzigung > «はりつけ»

25. Bibeltext:Allda kreuzigten sie ihn

聖句「そこでユダヤ人たちはイエスを十字架につけた」

26. Choral:In meines Herzens Grunde

コラール「私の心の底では」

27. Bibeltext:Die Kriegsknechte aber

聖句「さて 兵士たちは」

28. Choral:Er nahm alles wohl in acht

コラール「彼は最期の時に臨んで」

29. Bibeltext:Und von Stund an

聖句「この時から」

< Jesu Tod > «イエスの死»

Darnach, als Jesus wußte, daß schon alles vollbracht war

「イエスはいまやすべてが成し遂げられたことを知り」

30. Arie (Alt):Es ist vollbracht!

アリア (アルト：谷地畝晶子) 「果たされました！」

31. Bibeltext:Und neiget das Haupt und verschied

聖句「そして首を垂れ 息を引き取った」

32. Arie (Baß) und Choral(Chor):Mein teurer Heiland, laß dich fragen

アリア (バス：淡野 太郎) とコラール (合唱) 「私の愛しい救い主よ、教えてください」

33. Bibeltext:Und siehe da, der Vorhang im Tempel zerriß

聖句「その時、見よ、神殿の幕が」

34. Arioso (Tenor):Mein Herz, in dem die ganze Welt

アリオージョ (テノール：鳥海 寮) 「私の心よ、おまえの中で全世界が」

35. Arie (Sopran):Zerfließe, mein Herze, in Fluten der Zähren

アリア (ソプラノ：村元 彩夏) 「流れ出なさい、私の心よ、溢れ出る涙の中に」

36. Bibeltext:Die Juden aber, dieweil es der Rüsttag war

聖句「ユダヤ人たちは翌日の安息日に」

37. Choral:O hilf, Christe, Gottes Sohn

コラール「助けてください 神の子キリストよ」

< Begrabnis > «埋葬»

38. Bibeltext:Darnach bat Pilatum Joseph von Arimathia

聖句「イエスの弟子なのを隠していたアリマテヤのヨセフが」

39. Chor:Ruht wohl, ihr heiligen Gebeine

合唱「安らかに眠ってください、聖なる骸よ」

40. Choral:Ach Herr, laß dein lieb Engelein

コラール「ああ 主よ、あなたの愛する御使いに命じ」

指揮者プロフィール

佐々木 正利

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。故須賀靖元（声楽）、故服部幸三（音楽学）、小林道夫（演奏法）、森晶彦（発声法）、故松本民之助（作曲）、故岳藤豪希（宗教音楽）の各氏に師事。

1973年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡りL.フィッシャー教授に師事。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H.クレッチマル教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に1980年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP.シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、世界、日本の著名オーケストラのソリストとして度々起用され、K.マズア、H.シュタイン、H.プロムシュテット、小沢征爾、R.シャイー等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また世界的宗教音楽の名指揮者であるH.リリング、H.J.ロツチュ、M.コルボ、R.ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を受けている。

特に世界的バッハ指揮者H.ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステン演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1979年、1985年ザルツブルグ音楽祭に招聘され、モーツァルト管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊と、バッハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」等を共演し好評を博した。

在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、『コジ・ファン・トゥッテ』のフェランド、『フィデリオ』のヤッキーノ、スカララッティ『グリゼルダ』のコラード役で出演。

現在までリサイタル32回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

1970年東京芸術大学バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後40年以上に亘って主に宗教曲の演奏に力をみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての20数回に亘るヨーロッパ公演では『シュツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993年のヴィンシャーマンとのマタイでは、『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また1995年のJ.ツィルヒ指揮ニュルンベルク交響楽団との天地創造では『音楽と言葉との見事なまでの融合』とその音楽作りが絶賛された。

1987、88年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにてTen.マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。門下生として世界の歌劇場で活躍する国際的歌手、オラトリオ・リート歌手、大学教授等音楽指導者を多数輩出しており、またコンクール優勝者等も数多い。

1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞（学芸部門）が贈られ、2011年には日独交流150周年を記念して、ドイツ大使館より日独友好賞（功労賞）が授与された。

現在、岩手大学教育学部教授、及び東北文化学園大学特任教授。二期会会員。日本声楽発声学会副会長、日本音楽表現学会会長諮問委員、仙台バッハ・アカデミー及び盛岡市文化振興事業団理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会、東京21合唱団、東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団、各指揮者、山響アマデウスコア音楽監督。二期会バッハ・バロック研究会講師。



ソリスト・プロフィール

及川 豊 (テノール)



盛岡市出身。下橋中在学中に合唱コンクールでの審査員として訪れた故中村伸一郎氏とお会いして音楽家への志を抱く。盛岡一高を経て岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科を卒業。それぞれ音楽部、合唱団で学生指揮者なども経験し音楽的基礎を培った。その後、東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。フェラインには1990年より参加、演奏旅行などではシュッツ、メンデルスゾーンのパートソロを務めた。声楽を故志田久子、小原一穂、佐々木正利、鈴木寛一の各氏に師事。バロック初期から古典派までの宗教曲を得意とする一方、ルネサンス音楽を中心とした少人数でのアンサンブル歌手としても活躍している。これまでに、シュッツやバッハの受難曲の福音史家、シャルパンティエ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、サン＝サーンス、メンデルスゾーンなどの宗教曲でソリストを務める。また、2014年にはシューマン『詩人の恋』を全曲演奏し好評を博す。古楽アンサンブルについて花井哲郎、R.スチュアートの各氏に影響を受けるとともに、グレゴリオ聖歌の演奏法を両氏に加え橋本周子女史とG.ヨッピヒ氏に薫陶を受ける。ヴォーカルアンサンブル・カベラ、聖グレゴリオの家聖歌隊「ファヴォリート」、ベアータ・ムジカ・トキエンシス、各メンバー。他多くのアンサンブルの演奏会、録音に参加。聖グレゴリオの家宗教音楽研究所合唱講師。

鏡 貴之 (テノール)



盛岡市出身。盛岡三高を経て岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活躍中。特にJ.S.バッハの作品では『クリスマス・オラトリオ』『ヨハネ受難曲』『ミサ曲短調』や多数の教会カンタータのソロを務め、活動の中心になっている。これまでにヘルムート・ヴィンシャーマン、ハンス・マルティン・シュナイト、鈴木雅明、ヴォルフ・ディーター・マウラー等の著名な指揮者と共演して高い評価を得ている。東京藝術大学在学時、藝大合唱定期ではオーディションを通過しブルックナーの『テ・デウム』『ミサ曲第3番短調』にテノールソロで出演する。また、2011年2月にはソロリサイタルでシェーベルト『冬の旅』を歌い好評を博す。第4回東京国際声楽コンクール第1位、並びに審査員特別賞、東京新聞賞受賞。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、日本声楽発声学会、各会員。東京バッハ合唱団、東京ムジカクライス合唱団、各ヴォイストレーナー。バッハ・コレギウム・ジャパン、ベアータ・ムジカ・トキエンシス、エクス・ノーヴォ室内合唱団、各メンバー。

小原 浄二 (バス)



花巻市出身。岩手大学教育学部附属小・中学校、盛岡三高を経て岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業後、東京藝術大学音楽学部声楽科に進学し首席で卒業。松田トシ賞受賞。同大学院修士課程独唱科修了。声楽を、森肇子、佐々木正利、故伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。ドイツリート、オラトリオを中心に研鑽を積み、東京藝大時代には小林道夫氏のもとバッハカンタータクラブに所属し、研究・演奏を行う。その後、国内外の演奏会にソリストとして出演。1992～1994年には、鈴木雅明氏が音楽監督を務めるバッハ・コレギウム・ジャパンのコーラスマスター及びソリストとして活躍。1994年～1995年ドイツ留学し、H.クレッチマル氏に師事。留学中も積極的に演奏活動を行い、特に、ミュンヘン、ヘラクレスホールにおけるニュルンベルク交響楽団定期公演、J.ツィルヒ指揮、ハイドン『天地創造』バスソロなどは、現地新聞紙上において絶賛される。帰国後も全国各地に招かれソロ活動を行い、宗教音楽の世界的名指揮者である、H.J.ロツチュ、G.Ch.ピラー等との共演や、新日本フィルハーモニー交響楽団定期公演における、G.ボッセとの共演のほか、関西フィル、オーケストラ・アンサンブル金沢、紀尾井シンフォニエッタ東京、スウェーデン放送合唱団との共演などで高い評価を得ている。現在、高知大学教育学部教授。高知バッハカンタータフェライン指揮者。

淡野 太郎 (バス)



リオ・デ・ジャネイロ出身。東京都立芸術高校音楽科卒業後、大学浪人時代は盛岡で研鑽を積み、その時以来盛岡バッハ・カンタータ・フェライン及びグルッペ・ベッヒラインに所属。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。ここまでの期間、声楽を岡崎實俊、佐々木正利、嶺貞子、リコーダーを守安功、濱田芳通、ファゴットを山上貴司、室内アンサンブルを野村満男の諸氏に師事。藝大在学中にはバッハカンタータクラブに在籍、小林道夫氏の薫陶を受ける。1989年から2001年まで12年の歳月をかけて行われた「ハインリヒ・シュッツ全作品連続演奏」プロジェクトのほとんどに参加、その際に演奏したシュッツ作品は合計で450曲以上にのぼる。1997年以降度々渡欧し、声楽及び歌曲解釈等をA.ギーベル、C.モラーヌ、Z.ファンダステルネ、H.Ch.ポルスターの諸氏に師事。また2003年から2004年にかけてドイツ・ヘアフォルトのヴェストファーレン教会音楽大学に学び、声楽をS.シャマイト女史に、リコーダーをE.シュヴァンダ女史に、合唱指揮をH.ハーケ氏に師事。2004年から06年までライブツィヒ・ゲヴァントハウス室内合唱団メンバー。現在、ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京、ユビキタス・バッハ、メンデルスゾーン・コアの常任指揮者を務める他、リートやオラトリオの歌手、またリコーダーやドゥルツィアン奏者としても活躍中。ドイツ歌曲研究会「ノイエ・クレング」会員。「ムジカ・ポエティカ」演奏スタッフ。



佐々木 直樹 (バス)

釜石市出身。盛岡三高、岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業。東京藝術大学音楽学部声楽科を経て、同大学大学院音楽研究科修士課程独唱専攻修了。声楽を小原一穂、佐々木正利、佐々木まり子、故伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。J.S.バッハの教会カンタータやミサ曲、『クリスマス・オラトリオ』『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『マニフィカト』、モーツァルト、フォーレ、デュルフレ『レクイエム』、ヘンデル『メサイア』など、宗教曲のソリストとして活躍。また、バッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとして数々の公演や録音に参加している。2013年にデュオ・リサイタル、2015年にソロ・リサイタルを行い好評を博す。2003年～2006年、岩手大学教育学部非常勤講師。現在、島根大学教育学部准教授。松江バッハ・カンタータ・フェライン指揮者。日本声楽発声学会会員。島根県合唱連盟副理事長。



藤崎 美苗 (ソプラノ)

金ケ崎町出身。水沢高校を経て岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院音楽研究科修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、瀬山詠子、故朝倉蒼生、野々下由香里、ベーター・コーイ、マックス・ファン・エグモントの各氏に師事。第10回友愛ドイツ歌曲コンクール第2位入賞。これまでにJ.S.バッハの教会カンタータ、『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『ミサ曲短調』『クリスマス・オラトリオ』、ヴィヴァルディ『グローリア』、ヘンデル『メサイア』、ハイドン『天地創造』、モーツァルト『レクイエム』、メンデルスゾーン『エリア』『聖パウロ』、フォーレ『レクイエム』、ラター『マニフィカト』などの宗教曲でソリストを務める。またバッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとして公演及び録音に参加、ドイツ公演『マニフィカト』や東京でのメンデルスゾーンプロジェクトなどでソロを務める。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。声楽アンサンブル小瑠璃メンバー。京葉混声合唱団、TRuMP、ファイルヒェン湘南、アンサンブルマルディ、ミルフィーユ各指揮者。



村元 彩夏 (ソプラノ)

青森県五所川原市出身。五所川原高校を経て岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程独唱専攻、博士後期課程修了。R.シューマンの歌曲を研究し博士号(音楽)取得。第60回藝大メサイア出演。2014年度三菱地所賞授賞。2009年第20回友愛ドイツ歌曲コンクール第1位、文部科学大臣賞授賞。副賞としてウィーン「ベーゼンドルファーホール」にてリサイタルを開催。2016年第85回日本音楽コンクール第1位、ナカミチ賞、岩谷賞授賞。J.S.バッハの教会・世俗カンタータやミサ曲、『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『ミサ曲短調』『クリスマス・オラトリオ』、ヘンデル『メサイア』、ベルゴレージ『聖母マリアの夕べの祈り』(日本初演)、モーツァルト、シューマン、フォーレ、ラター『レクイエム』、ベートーヴェン『第九』、メンデルスゾーン『エリア』『聖パウロ』、ブラームス『ドイツ・レクイエム』、ドヴォルザーク『スターバト・マーテル』等宗教曲のソリストを務める。オペラでは『愛の妙薬』アディーナ、『ラ・ボエーム』ミミ、ムゼッタ、『カヴァレリア・ルスティカーナ』ローラ役等。2013年Theatre Lyrique 20主催国際オペラガラコンサート(モントリオール)日本代表。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生、秦貴美子、寺谷千枝子の各氏に師事。東洋英和メサイアを歌う会、ミナトシティコーラス、エルヴィオ・ソーヌス、ヨハネス・カントーレス、宇都宮合唱倶楽部各ヴォイストレーナー。東京藝術大学音楽学部声楽科助手。



金成 佳枝 (ソプラノ)

滝沢市出身。盛岡三高を経て岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース、東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。卒業時に成績優秀者として同声会賞を受賞。現在、同大学院音楽研究科修士課程独唱専攻2年次に在学中。これまでにJ.S.バッハの教会カンタータ、受難曲、M.ハイドン『レクイエム』、モーツァルト『レクイエム』、グノー『聖セシリア荘厳ミサ』、ブーランク『グロリア』などの宗教音楽のソリストを務める。第26回大曲新人音楽祭コンクール奨励賞。第28回国際古楽コンクール入選。第27回日本ドイツ歌曲コンクール入賞。モーツァルト・アカデミー・トウキョウ、ヴォーカル・コンソート東京、サリクス・カンマーコア、ノヌラマクタラ室内楽団各メンバー。モーツァルト記念合唱団合唱アシスタント。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。東京藝術大学バッハ・カンタータ・クラブ団員。



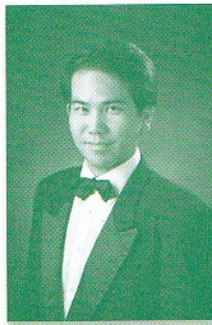
小原 伸枝 (アルト)

釜石市出身。水沢高等学校在学中、阿部佳代氏の手ほどきを受け声楽を学び始める。また、ピアノを佐々木佐和子氏に師事。岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科及び東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院音楽研究科修士課程独唱科修了。声楽を、佐々木正利、伊藤亘行、伊原直子の各氏に師事。1991年、NHK洋楽オーディション合格。東京藝大在学中はバッハカンタータクラブに在籍し、小林道夫氏のもとで研究、演奏を重ねる。1992～1994年バッハ・コレギウム・ジャパンに所属し、カンタータ連続演奏会などで多くのソロを歌う。1994～1995年ドイツに留学し、H.クレッチマル氏に師事すると共に、多数の演奏会においてバッハ・モンテヴェルディ・ロッシニ作品などのソリストを務め称賛される。帰国後も全国各地に招かれソロ活動を行い、特にバッハの演奏で高い評価を得ている。現在は高知市に住み、1996年に立ち上げた高知バッハカンタータフェラインの活動を通して、地元でバッハの音楽を紹介し、その素晴らしさを浸透させるべく情熱を注いでいる。高知大学教育学部、及び高知福祉専門学校非常勤講師。若草幼稚園、及び高知大学教育学部附属小学校お母さんコーラス指導者。女声アンサンブル die Farbe 主宰。



谷地 晶子 (アルト)

盛岡市出身。盛岡北高を経て岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京藝術大学音楽研究科修士課程独唱専攻及び博士後期課程修了。博士号取得。第16回日仏声楽コンクール第1位。2012年度三菱地所賞受賞。第57回藝大メサイア、第28回台東区第九、第349回藝大合唱定期ベートーヴェン『ミサ・ソレムニス』のアルトソロ、第54回藝大定期オペラ『ファルスタッフ』クイックリー夫人を務める。また、J.S.バッハ『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『ミサ曲短調』『クリスマス・オラトリオ』、ヘンデル『メサイア』、モーツァルト、ヴェルディ、ドヴォルジャーク、デュルフレ『レクイエム』、ベートーヴェン『第九』、メンデルスゾーン『エリア』『聖パウロ』等においてアルトソリストで出演。これまでに関西フィルハーモニー、藝大フィルハーモニーなどと共演している。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、故朝倉蒼生、森晶彦、伊原直子、寺谷千枝子の各氏に師事。現在、岩手大学、岩手県立大学非常勤講師。



鳥海 寮 (テノール)

函館市出身。函館大学附属有斗高校卒業。盛岡で1年間佐々木正利氏の元で研鑽を積んだ後、東京学芸大学及び同大学院修士課程修了。オラトリオ、カンタータをはじめとした宗教曲の歌手として、バロック作品からハイドン、モーツァルト、シューベルト、メンデルスゾーン、サン・サーンス、ドヴォルザーク、プッチーニ等の宗教音楽作品でソリストとして起用され定評を得ている。特にバッハ作品の歌唱が多く、『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『クリスマス・オラトリオ』の福音史家役は各地で好評を博している。また、ヘンデル『メサイア』、ベートーヴェン『第九』はソリストとして多数出演するほか、合唱指揮者としても数多くの演奏会を成功に導いている。オペラでは、ドニゼッティ『愛の妙薬』ネモリーノ、ビゼー『カルメン』ドン・ホセ等で出演したほか、モーツァルトのオペラ諸役やオッフェンバックのオペレッタ『天国と地獄』のオルフェ役などの軽妙な役柄も得意とする。近年、指揮者としての活動を始動。これまでにバッハ『マタイ受難曲』『ミサ曲短調』、ヘンデル『メサイア』、ベートーヴェン『第九』を指揮し、いずれも成功を取める。声楽を徳永ふさ子、佐々木正利、高橋修一、横山和彦の各氏に、発声を森晶彦氏に師事。現在サレジオ小学校音楽科教諭。函館マタイ受難曲を歌う会、ハレルヤ合唱団各指揮者。霊南坂教会聖歌隊副指揮者。東京21合唱団コンサートマスター。新島学園短期大学聖歌隊、青山学院大学第二部聖歌隊、青山学院女子短期大学聖歌隊などでヴォイストレーナーを歴任。日本声楽発声学会会員。



西野 真史 (テノール)

盛岡市出身。盛岡一高卒業。岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コースを経て、同大学院教育学部研究科音楽コース修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。ゲルト・テュルク、シュテファン・スミッツ各氏による公開レッスンにてドイツ歌曲や宗教曲等の研鑽を積む。岩手在住のテノール第一人者として、これまでに2011年堺石ベートーヴェン『第九』コンサートや、2014年3・11祈りのコンサート、モーツァルト『レクイエム』、J.S.バッハなどのカンタータ、オラトリオのソロを度々務め、P.シュライアー指揮バッハの『ヨハネ受難曲』のテノールソロでは指揮者より賛辞を贈られる。また、ここ数年間にわたるキャラホール主催オペラ講座では、ビゼー『カルメン』のホセ、マスカーニ『カヴァレリア・ルスティカーナ』のトゥリッドウ、ヴェルディ『椿姫』アルフレード、ベートーヴェン『フィデリオ』フロレスタン、プッチーニなど様々な作曲家、原語、時代の主要な配役を実演でこなし、好評を得ている。2012年石川啄木没後100年企画にて「初恋」など地元縁ある演奏も行い、盛岡を中心としたレパートリーの広い活動をこなし、市内中・高生のヴォイストレーニングも行なう。一方、H.ヴィンシャーマン、H.リリング、ダビッド・ティムなど世界的指揮者による水戸室内管弦楽団やオーケストラ・アンサンブル金沢、山形交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団の各地定期演奏会に参加し、2013夏ドイツでのブラームス『愛の歌』など、合唱やアンサンブルリストとしての活動にも力を入れている。日本声楽発声学会、日本音楽表現学会、日本学校音楽教育実践学会、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グルッペ・ベッヒライン各会員。盛岡大学、同短期大学部非常勤講師。

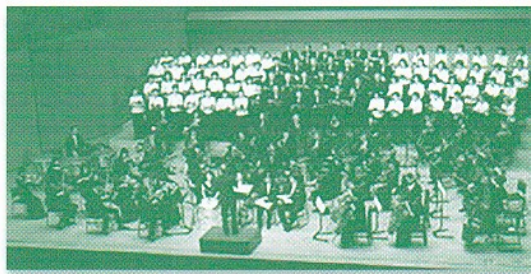


沼田 臣矢 (テノール)

滝沢市出身。盛岡北高を卒業。岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コースを中途退学し、東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。現在同大学大学院音楽研究科バロック声楽専攻に在学中。これまでに声楽を佐々木まり子、佐々木正利、川上洋司、野々下由香里、ゲルト・テュルクの各氏に、指揮を田中良和に師事。BS-TBS「日本名曲アルバム」にレギュラー出演している社団法人ハルモニア・アンサンブルには2011年頃から多数助演しており、出演回数は40回以上に及ぶ。他に古楽アンサンブル・コントラポント、Vocal Consort Tokyo、モーツァルト・アカデミー・トウキョウ等にも度々出演している。J.S.バッハ演奏団体であるバッハ・コレギウム・ジャパンにも出演。2015年12月サントリーホールにて行われた「バッハ・コレギウム・ジャパンのクリスマス物語」においては「3人の賢者」役でソリストを務める。2015年より自身が主催と指揮を務めるノヌラマクタラ室内楽団を結成。結成から間もなくしてNHK「ららら♪クラシック」に出演する。自主公演はこれまでに5回行っている。テノールソリストとしてはこれまでにG.F.ヘンデル『メサイア』、J.S.バッハ『マタイ受難曲』『ミサ曲短調』『マニフィカト』『クリスマス・オラトリオ』その他教会カンタータ多数、W.A.モーツァルト『小ミサ曲』『フィガロの結婚』クルツィオ役、M. ハイドン『レクイエム』等のソリストを務めている。現在東京藝大バッハカンタータクラブ演奏委員長。

管 弦 楽

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル



東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京藝術大学の学内サークルとして、永年小林道夫氏のもとで、活発な演奏活動が続けてきた芸大バッハ・カンタータ・クラブの器楽のOB、OGを中心に、卒業後もバッハを中心とした宗教作品を演奏して行こうと有志が集まって結成された。メンバーは各自それぞれがソリスト、室内楽、オーケストラ、大学講師等、各方面で活動している為、多少流動的だが、1977年にこの名前で活動をはじめてから既に40年以上を経ており、バッハやヘンデル等のバロックからハイドン、モーツァルトの古典派を経て、最近ではドヴォルザーク、ブラームス等のロマン派に至るまでレパートリーを広げている。その演奏はいずれもが様式感にのっとりた生き生きとしたもので、共演した各合唱団や指揮者、ソリスト等から高い評価を得ている。

過去においては、W.ヤーコプ、H.ヴィンシャーマン、E.ヴァイアント、H.J.ロッチュ、P.ノイマン、小林道夫、黒岩英臣等、内外の演奏家との共演をはじめ、バッハ合唱団、CMA合唱団等、全国各地の合唱団と共演し、現在は年間おおよそ10～15回程度、日本全国各地の合唱団やソリストからの依頼を受けて共演している。

(コンサートマスター：蒲生 克郷)

第一ヴァイオリン	蒲生 克郷	大谷美佐子	吉田 篤	清岡 優子
第二ヴァイオリン	海保あけみ	磯田ひろみ	西尾 優子	
ヴィオラ	李 善銘	鈴木友紀子		
チェロ	牧野ルル子	豊原さやか		
コントラバス	永田 由貴			
フルート	阿部 博光	丹野恵美子		
オーボエ	小畑 善昭	石井 智章		
ファゴット	寺下 徹			
ヴィオラ・ダ・ガンバ		福澤 宏		
オルガン	今井奈緒子			
チェンバロ	劔持 清之			

合唱

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン



1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねによりヴィンシャーマン、ロッチュ、マズア、リリング、岩城宏之等世界的指揮者との共演を重ね、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として熱い評価を得るようになった。この演奏会で40周年を迎える。

【ソプラノ】

○ 赤塚 温子	朝倉 美優	石川 夕夏	● 板宮 渚	太田 彩里	大矢 克子
小笠原香澄	岡野美映子	岡山ひかり	小川 牧子	小田島沙英	小原 育世
加藤 真香	S 金成 佳枝	兼松由希子	熊谷 充代	昆 千晶	斎藤 純子
佐々木あかり	佐藤 澄江	● 佐藤 千明	高橋 幸枝	田村 広子	塚野 麗子
外崎 麻子	○ 中野 蘭子	芳賀 志歩	花立由紀子	S 藤崎 美苗	藤原 優花
真下 祐子	三原 佳織	S 村元 彩夏	本良いよ子	八木 絵未	

【アルト】

一井 彩来	伊藤 京花	☆ 小川 暁美	小川 暁子	S 小原 伸枝*	金子 千鶴
桐原 絹子	佐藤 公	高橋 知子	○ 田口千紗都	千葉 春奈	千葉ゆつき
続石真奈美	● 野澤安里彩	平井 良子	檜山 奏子	廣澤真紀子	藤澤 久子
藤代 伸子	細谷地美奈子	● 本田 奏子	三宅真佐子	茂木 容子	S 谷地畝晶子
遊佐 紘子	渡辺しをり				

【テノール】

伊藤 陽平	S 及川 豊	小川 隆弘	鏡 貴之	柿崎 倫史	加藤 進也
● 佐々木 駿	☆ 佐々木幹雄	四戸 敬昭	● 田中 雅史	田邊 尚人	S 鳥海 寮*
中野 奏保	中野 寛司	新山 隆健	○ S 西野 真史	S 沼田 臣矢*	藤澤 健
細沼 佑貴	堀川 佑也	三原 正敏	○ 吉村 哲		

【バス】

赤塚 貴史	● 荒井 涉吾	◇ 宇津野智成	大室 桂太	☆ 小原 一穂	○ 小菅 悠樹
S 佐々木直樹*	○ 佐藤 和久	佐藤 玲央	高橋 聡	● 玉山 彰彦	S 淡野 太郎*
芳賀 郁夫	廣澤 昭典	松橋 清	渡辺 信之		

指揮者：佐々木正利 伴奏者：八木 絵未、高橋 知子、千葉 春奈

☆…コンサートマスター / ミストレス

◇…アシスタントコンダクター

○…パートリーダー

●…サブパートリーダー

S…ソリストとしても出演

*…賛助出演

《ヨハネ受難曲》鑑賞の手引き

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサートマスター 佐々木幹雄

本日演奏する楽曲は、『ヨハネによる福音書』の受難の記事(第18章、第19章)にJ.S.バッハ(1685-1750)が作曲した《ヨハネ受難曲》BWV245です。バッハは《ヨハネ受難曲》をライプツィヒに赴任した直後の1724年に初めて作曲・演奏しています。その後何度か再演しながら改訂を重ね、1749年に改訂して再演したのを最後に、翌年65歳で亡くなりました。この最後の稿を一般的に「第4稿」と呼んでいます。

○「受難」とは？

「受難」とは、神の子であるイエスが捕らえられ、十字架につけられ、殺されたことを言います。世界の創造主である神が人間を救うために御子イエスをこの世に遣わし、この罪なきイエスが人間の罪を全て背負って人間の身代わりとなって死ぬ、このことは人間を罪から救う神の恵みであり恩寵であるとキリスト教では考えられています。また同時に、ユダヤ教の聖典であった旧約聖書の預言が成就することでもあります。

○「受難『曲』」とは？

キリスト教において、神の計画の通りにイエスが磔になり死ぬことはとても重要なことです。ですから、聖書に書かれ伝えられてきたその出来事を教会に集う信徒に伝えて、神への信仰を強くさせなければなりません。そこで、聖書の受難の記事を音楽というメディアを使って人々に伝えようとしたのが、受難曲です（ちなみに「受難劇」というメディアもあります）。

中世には受難の記事（聖書の文言）が助祭によって朗読されていました。13世紀になると会話文などを分担して朗読されるようになり、このころから地の文を担当する福音朗読家（エヴァンゲリスト）の役割が登場します。その後数世紀を経て、ルター派教会ではJ.ヴァルター(1496-1570)やH. シュッツ(1585-1672)により音楽としての受難曲が発達し、18世紀のバッハに見られるようなオラトリオ風受難曲の形式へとたどり着きました。

受難曲は1年に1回、教会暦の聖金曜日（例えば1749年は4月4日、2017年は4月14日）の礼拝でイエスの受難についての説教が行われ、その説教の前後（「第1部」は説教の前、「第2部」は説教後）に演奏されました。バッハが演奏したライプツィヒの町では聖トーマス教会と聖ニコライ教会で年ごとに交互に演奏されており、今回の第4稿が演奏されたのは聖ニコライ教会でした。

○どんな物語か？

今から二千年ほど前、イスラエルのエルサレムという町の近辺での出来事です。

まず第1部です。初めはキドロン谷の向こうの園に、弟子のユダを含むローマの兵士たちなどの一団が訪れ、イエスを逮捕します(新バッハ全集による番号付けによると第2～5曲。以下同じ)。イエスが連れて行かれた先は大祭司アンナスの邸宅。そこでイエスはアンナスに尋問を受けます(第6～11曲)一方師であるイエスを外で待っていた弟子のペテロは師の预言通りイエスを「知らない」と3度否認し、自らの信仰の弱さを悔やみ泣きます(第12～14曲)。

続いて第2部です。場所はローマから派遣された総督ピラトの官邸です。官邸内では連行されたイエスがピラトの尋問を受けます。ピラトを取り巻くローマの兵士たちも登場しイエスを辱めます。官邸の前ではピラトとユダヤ人たちとの問答が行われ、それによってイエスの刑が十字架による磔刑へと決まっていきます(第15～23曲)。最後はゴルゴタの丘が舞台です。十字架に磔にされたイエスとそれを取り巻く兵士たち、それから母マリアらとの会話、そして死を迎え、埋葬されます(第23～38曲)。

○どんな音楽？

説教で語られる受難の意味を、音楽を通して信徒の心に届けようとしたのでしょう、バッハは様々な工夫をしています。あたかも目の前で受難の物語が進行しているかのように、言葉や雰囲気と合致した音楽づけをしたり、歌い手に役割を分担して演劇性を高めたり、物語に寄り添う信者であるの心情を代弁するようにアリアやコラール（後述）などの楽曲を挿入したり…。また『ヨハネによる福音書』が説く受難の意味、すなわち神と人間との仲立ちとしてのイエスの存在やその象徴としての十字架の価値を鋭く読み取って、全体の楽曲構成や歌詞、音楽に反映させたりもしています。

歌われる楽曲はたくさん（新バッハ全集の番号付けによれば全部で40曲）あるのですが、それらの歌詞には3つの種類があります。

まず、聖句と呼ばれるもので、聖書の言葉そのもので受難の物語の記事です。物語の進行役としていわゆる「地の文」を語るのが福音朗読家（エヴァンゲリスト）です。テノールの朗唱（レチタティーヴォ）が基本です。また、登場人物であるイエスやピラトなどの言葉（会話文）はそれぞれの独唱者が担当します。下役のユダヤ人たちや兵士、祭司長など群衆の言葉は合唱が担当します。合唱は対位法的に作曲されています。

次に、自由詩と呼ばれるもので、物語の進行を受けて、その物語を見ている（聴いている）者の心情を象徴し、あるいは代弁するものです。物語の途中に挿入され、多くはアリアやアリオージとして、独唱者により感情に訴えるように音楽性豊かに歌われます。冒頭（第1曲）と最後から2曲目（第39曲）は合唱で歌われます。

最後に、コラールと呼ばれるもので、ドイツのルター派教会の会衆讃美歌です。これも物語の進行を受けてところどころに挿入されます。教会に集った信徒たちの、それぞれの場面での気持ちを代弁するものです。また、物語は過去の出来事としてとらえられますが、コラールによって聞き手は受難の物語に「私たちはどうなのか」と現代的な価値づけが求められます。さらに、同じ旋律の讃美歌ながら和声づけが異なっているものもいくつかあります。音楽的な統一感をもたせながら歌詞に応じて音楽づけをするというバッハの真骨頂とも言えます。

楽曲構成の上での工夫の代表的なものは第2部冒頭のコラールに続く場面にあります。ピラトによる尋問が始まった場面からゴルゴタの丘で十字架につけられる場面までの間が、「神の子よ、あなたが囚われたことで」のコラール（第22曲）を中心にして、その前後にレチタティーヴォやコラール、アリア、合唱などの曲種が対称的に配置されていることです。この対称的（シンメトリー）な構成によってその中心のコラールの位置づけを高め、『ヨハネによる福音書』が最も重きを置く「人間との仲立ちとしてのイエスの存在」をひととき強調し、バッハはそのことを核心としたわけです。しかもシンメトリー構造とは十字架を象徴するものでもあります。

その他にも、アリアの形式において当時一般的であったダ・カーポ形式を崩したり、アリアごとに多彩なオブリガート楽器を選択したり、音楽の随所に情念を表現する「フィグール」と呼ばれる音型などの修辭的技法が用いられていたり、《ヨハネ受難曲》はバッハの音楽の特長が満載です。

1950年のバッハ没後200年を記念する事業の際に発刊された小エッセー集の中で、M.J.ナウマンは次のように書いているそうです。

「私たちはルターの説教を聞くことはできない。私たちは、過去の栄光ある偉大な説教者たち説教を読むように、彼の説教を読むのみである。しかしながら、私たちはバッハの説教を聴くことができる。彼以外の偉大な音楽家の作品は私たちに語りかけるが、バッハの作品は私たちに説教するのである。」
(Martin J. Naumann, H.Lilje, "Bach als musikalischer Prediger der Lere Luthers," 1953 新井章三訳)

268年前にバッハによって演奏された《ヨハネ受難曲》による説教を、本日じっくりとご体験ください。

『フェラインは永遠に不滅です、と言えるために』

みなさま、こんにちは。指揮者の佐々木正利です。本日は、わたしたち盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの創立40周年記念「バッハ『ヨハネ受難曲』演奏会」にようこそおいでくださいました。衷心より御礼申し上げます。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン（通称：フェライン）は今を遡る40年前、すなわち1977年（昭和52年）の2月に発足しました。立ち上げ当初は、バッハのカンタータを歌う会と呼んでいましたが、程なく現在の名前に変更されました。この名をドイツ語に直しますと“Bachkantatenverein, Morioka”となります。前者の長々しい横文字は三つの名詞に分けられ、Bach（バッハ）+Kantate（カンタータ）+Verein（協会、クラブ）の結合体です。

1977年当時、私は東京芸大の大学院生で、1970年（昭和45年）に創立メンバーの一人として立ち上げた「東京芸大バッハ・カンタータ・クラブ」の演奏委員長（巷でいう学生指揮者）をしていましたので、その名前に似せ、しかも世界のオーケストラの雄、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地である“Musikverein, Wien”（ウィーン楽友協会）の響きにも憧れ、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと名付けた経緯があります。

このフェライン、今では私の元から巣立って行った、本日イエス役を歌う小原浄二君とピラト役を歌う佐々木直樹君が、それぞれ高知と松江でフェラインを興し、四国でフェラインといえば「高知バッハ・カンタータ・フェライン」を、島根県でフェラインといえば「松江バッハ・カンタータ・フェライン」を指すように、かなりグローバルな名称として定着してきました。そういえば、30年前に私を指揮者として創立された「岡山バッハ・カンタータ協会」も、原語では“Bachkantatenverein, Okayama”と言いますから、四国、中国地方には三つのフェラインが存在することになります。

このフェラインという呼び名ですが、Vereinはドイツ語での発音が「フェア・アイン」と、厳密に言えばリエゾンしませんので、現地の人たちの前でフェラインと発音すれば、不思議そうな顔をされるだけで通じません。

おっと、話が最初から横道に逸れそうになりましたので本筋に戻します。

さてさて、こうして発足した盛岡のフェラインでしたが、当初は各パート四、五人ずつくらいの室内合唱団規模でしたし、また会員（フェラインでは、名前が「協会」なものですから、団員とは呼ばずに会員と呼んでいます）も、バッハのカンタータを勉強したいということが目的でしたから、独自の演奏会は私がドイツから帰ってくるまで、すなわち発足後数年間、開催しませんでした。

もっとも、演奏会を開くこと自体が目標ではないとは言っても、やはり練習だけしているのは何か一つもの足りない気がしたものです。そうした中、フェラインが発足してまもなくの4月に、私は博士課程に進学し、バッハをより専門的に研究するために、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの活動をいっそう充実させていきました。その一環として、クラブの演奏旅行を積極的に企画し、それから5年の間に2回も東北の地を訪れることとなりました。

すなわちフェラインは、芸大のカンタータ・クラブを盛岡に招致し、その演奏会の一ステージに、合同合唱として加わらせていただいたのです。しかも、われらがカンタータ・クラブの指揮者は小林道夫先生でしたから、発足当初の会員は小林先生の指揮・指導にあずかれるという、大変貴重な、夢のような体験に浴することができました。

ところで、当時わたしは東京に住み、声楽家としても月に3回は本番をこなしていたので、盛岡には月に1回、土日を利用して指導に来ていました。しかも横浜の私立高校の教諭をしていましたから、今のように新幹線などない時代、夜行寝台で盛岡通いをしていたわけです。

そんなわたしでしたが、1980年（昭和55年）のこと、4年に1回、バッハゆかりの地ライブツィヒ市で開催されている国際バッハ・コンクールが開催され、その機を逃すと次回は年齢オーバーでわたしには挑戦権がないことが判明、あわてて急遽勤めていた高校を退職しドイツに渡りました。コンクールでは何とか入賞することができましたが、そのことが契機となって、それから約2年間、わたしはドイツに留学することになったのです。

この2年間の間、フェラインの指揮・指導は、本日のコンサートマスターを務めてくださっている蒲生克郷さんに託しました。と言うより、実はわたしはドイツに渡るときに、できれば一生ドイツで生

活したいと考えていたものですから、もう盛岡に戻ってくることはないだろうと内心思っていました。ですから蒲生さんには、わたしが戻ってくるまでの間と嘘をついて出かけたものです。最初から、恒久的な指揮者をお願いしたいと彼に言ったなら、絶対引き受けてはくれないだろうなという読みがあったからです（蒲生さん、すみません。時効ということでお許しください）。

それが、わが大恩師、高橋功宜先生の多大なるお世話、ご厚情のおかげで、何と岩手大学に奉職できることになったわけですから、わたしにとっても、そしておそらくフェラインにとっても、最善の道が用意されることとなりました（と思っているのはわたしだけかもしれませんが）。

こうして、フェラインが発足してから40年、わたしがドイツから帰ってきて、じっくり居を構えてフェラインと音楽作りができるようになってから35年が経ちました。その間の思い出を語りだしたら、それこそキリがありませんが、嬉しかったこと（幸せだったこと）、悲しかったこと（残念に思ったこと）などを二、三抽出して話してみたいと思います。

嬉しかったことは、何と言ってもフェラインがこうして40年も続いていることに尽きます。続けてこられたからこそ、たくさんの幸運に出会えたのですから。もともと、バッハをはじめとする宗教音楽の土壌がほとんどなかった盛岡の地にフェラインが産声を上げ、多くの同志がその道筋を引き継ぎ、伝統としてそれを育み、曲がりなりにも好意的な評価をいただいてこられたのも、歴代の会員が真摯に音楽に取り組んできた賜物と思います。発足時からの継続会員は2名（桐原絹子さん、斎藤純子さん）となっていました。裏を返せば実に多くの人々がフェラインを支え、フェラインから巣立って行きました。その方々のほとんどすべてが、フェラインの活動を振り返るとき、幸せな思いに浸れるのではないのでしょうか。それは、フェラインにとっては誰一人として不要な人はなく、与する全員が、自分たちで築き上げてきた歴史だよ、と誇れるからだと思います。

わたしはときどき人から聞かれます。フェラインに入るにはオーディションがあるのでしょうか、と。いや、そんなことはないのですね。フェラインは音楽を、合唱を愛していれば誰でも入れるのです。来るもの拒まず、去るもの追わずがフェラインの流儀、来るのも自由、去るのも自由ですが、ただしのこと、籍を置いている間はいたずらに自己規制などせずに、本物を目指して努力を払う習慣がフェラインには根付いています。本物に憧れ、本物に触れたいという願いをもって、自分にできる努力をすることさえ心掛けていれば、たとえ声量がなくても、言葉がおぼつかず、また高音が出なくても、フェラインの一員として身を浸していれるのです。

そうした会員のうちから、本物ができる仲間が育ちました。本日は、実に13人ものソリストを起用しましたが、彼らはみな、その礎をこのフェラインで培った仲間です。その彼らを、バックの合唱団の中から、また会場の客席から、しっかり見守り応援しているはらがらがいるのもフェラインの強みです。その中には、前にいるソリストに決して勝るとも劣らない実力の持ち主が少なからぬ数いるのも、驚異的なことです。

今日ソロを担ってくれている仲間はみな、わが国を代表する歌手に育ってくれました。それはフェラインにとって、そしてもちろん、わたしにとっても誇りであり、喜びです。同時に、実にさまざまな個性や特徴をもった会員がフェラインにはおり、この40年間、そうした方々と切磋琢磨し、音楽の素晴らしさ、音楽する楽しみ、幸せを共有してこられたこと。そのことに勝る喜びはありません。

かつて、どなたかが「フェラインはうまい人間を集めているからうまいんだ」と仰られたという話を聞いたことがあります。でもそれは違います。確かにうまい人間がフェラインにはいます。しかしそうした人たちは、フェラインの活動を通じて成長したのであって、最初からうまかったわけではありません。そう、フェラインは個人をも伸ばしてくれるのです。それによって、全体の音楽もまた成長するのです。

さて、フェラインの歴史には、世界的バッハ演奏家にタクトを執っていただいた貴重な経験が盛り込まれています。それは一人、二人に留まりません。ざっと思い起こしても、二人のヘルムート、すなわちヴィンシャーマンとリリング、またトーマス・カントール（バッハもかつて務めた聖トマス教会の音楽監督）のハンス・ヨアヒム・ロツチュ、ライプツィヒ大学教会のカントール、ダヴィット・ティム、デットモルト音大元教授で、現在台湾のエヴァーグリーン交響楽団音楽監督のゲルノート・シュマールフス、はてさてフェラインの半数が演奏に参加したペーター・シュライヤーとのマタイ、ヨハネの両受難曲の共演等々。

そのうち、ヴィンシャーマン教授との信頼関係は特別で、バッハの四大宗教曲を共演したばかりではなく、ドイツはボン市にあるベートーヴェンホールでの、ドイツ・バッハゾリストンとの口短調ミサ共演のため、渡独したこともあり、またパリのユネスコ本部での国際平和コンサートで共演したこともあります。

ボンでの演奏会の折り、こんなことがありました。何とヴィンシャーマンは、フェラインという名称はドイツでは「サークル」「クラブ」といったアマチュア団体を指す言葉なので合唱団の名称を変えたいとして、“Chor der japanischen Bach-Gesellschaft Morioka”としてしまいました。この呼称を日本語に訳しますと「盛岡にある日本バッハ協会合唱団」となります。さすがにわたしは、フェラインの名前にこだわりと誇りをもっていましたので、ウィーンフィルの本拠地も“Musikverein, Wien”「ウィーン楽友協会」と、フェラインを使っているのではないですかと反論したのですが、ヴィンシャーマンは「あれはウィーンフィルを聴いたり、応援したりする倶楽部で、ウィーンフィルはフェラインではない。超一流のプロオーケストラであるドイツ・バッハゾリストンの演奏会に、アマチュアを指すフェラインなる団体が共演するとなると、矜持にも関わるし、ポスターを見たお客が来なくなる心配がある」と押し切られてしまいました。

結局、客席は満席で、演奏もつつがなくできたので、終演後はスタンディング・オベーションで称えていただいたのですが、わたしたちは、いい意味でアマチュアイズムを失いたくなく、しかし一方、音楽する際にはアマチュアの甘さを封印し、退路を断って演奏に臨む、それを勝手にフェライン魂と名付け、これからもその精神で素晴らしい音楽を享受し、伝承していきたいと考えています。

さて、ここまで嬉しかったことを話してまいりました。それでは目を転じて、悲しかったことはどうだったかと思い返してみましたが、幸いなことにあまりないのです。いや、数的に中々思い当たらないのですが、鮮烈な悲しき思い出、かつてこのころの琴線が悲鳴をあげる事件がありました。それは、生きていれば十中八九、今日のステージでもソロを担っていたでありましょう、愛弟子の鳴海真希子さんを34歳の若さで失ったことです。彼女は、フェライン時代にもわれわれに強烈なインパクトを残し、岩手大学から東京芸大に進み、大学院を経て、アメリカはジュリアード音楽院に留学。修了後はタンゲルウッド音楽祭やシュトゥットガルト国立歌劇場などで、豊かで深みのあるアルトを響かせていた鳴ちゃん。メラノーマの病魔に冒された彼女の死は、本当に悼ましいこととして無念の極みです。

また、残念に思ったことも少なからずあるにはあります。それはフェライン創立初期のメンバーが、わたしがドイツから帰国して盛岡に住み、岩手大学の教官として学生たちをフェラインに勧誘し、育てていったプロセスの中で、一人、また一人と離れていかれたことです。漏れ聞こえてきた話によりますと、フェラインの会員が増え、活動が充実していくにつれ、演奏会を視野に入れた活動が中心となっていくことについて、演奏のためにバッハをやるのではないと、発足当初の理念から活動方針が少しずつ離れていくことへの不満があったやに伺っております。

わたしとしては、そうした考え方に共鳴はいたしますが、演奏家として活動している以上、人前で演奏することの価値やそれによって得られる糧をよくよく知っておりましたので、特に若者たちへその経験を積ませたいとも思っていましたから、結局は後者の方に舵取りをすることになった経緯があります。

さて、このごろフェラインの今後について考えることがあります。フェラインには、たとえば三人のコンサートマスター、ミストレスをはじめとして、独立した合唱団の指揮者として十二分に力を発揮できる逸材が揃っていると思いますが、それにもかかわらず、そうした彼らがわたしの元で采配を振ることを選択してくれていることに、申し訳ない気持ちと、もったいない気持ち、そして反対に幸せな気持ちが絢交ぜとなり、早く後進に道を譲るべきかなと思ったりもします。しかしその一方で、あと20年は現役音楽家として活動したいという気持ちも強く、昨年意を決して膝の手術に踏み切った経緯もありますので、想いは複雑極まりません。

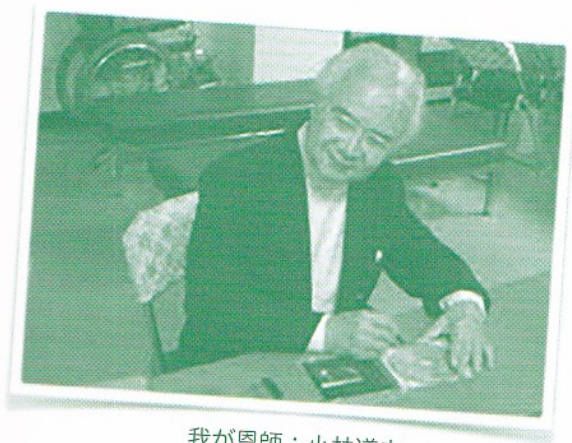
こんなときもあります。フェラインは、盛岡市民の受け皿として、市民合唱団的になるべきだという考え方が頭をもたげ、選曲一つとっても、バッハを中心とする宗教曲にこだわりをもつ反面、さまざまな楽曲を、より音楽的に具現化していく使命をフェラインはもつべきなのではないかと迷うのです。いずれにせよ、何歳になっても、何年やってきても真理は極めきれず、体力と気力が続く限り成長を止めてはいけないなと思っています。

わたしもついにバッハが亡くなった年になってしまいました。あと10日あまりで定年を迎えますが、今後何年かは嘱託教授として教育・研究に勤しむことが続きますので、まだまだ足らざるものではありますが、全体をバランスよく俯瞰し、フェラインを含めた自分の全方位に、どのような地平が展開していくのかを見定めていく所存です。

1960年代、巷では「巨人・大鵬・卵焼き」という言葉が闊歩していました。その巨人軍の中心選手だった長嶋茂雄さんが現役を引退するとき、「巨人軍は永遠に不滅です」という言葉を残して去って갔습니다。わたしはその長嶋さんが死ぬほど好きで憧れていましたので、それにあやかって「フェラインは永遠に不滅です」と言って去っていきたいと思います。真にそうなるよう、これから環境作りに励みます。何年かかっても、です。みなさん、ともにいてください。ともに応援してください。まずは次なる節目に向けて。



聖トマス教会聖歌隊席でのティム



我が恩師：小林道夫



盟友：飯森範親（真ん中）



ボンのヴィンシャーマン宅：シュマールフス（左端）と



OEK音楽監督：岩城宏之（右端）



我が友：黄金一味
おうごんいちみ

40年のあゆみ

当会「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」は1977年に結成以来「J.S.の教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、これまで、40年間活動が続けてきました。

主な演奏会と演奏旅行の経過は以下のとおりです。

1977/02	「カンタータを歌う会」として発足		
1977/06	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称		
1978/02	「バッハコンツェルト」	カンタータ45番、147番	指揮：小林道夫（芸大と共演）
1979/10	「BACH ABEND」	カンタータ 158番、131番	指揮：小林道夫
1980/02	「バッハの夕べ」	カンタータ80番	指揮：小林道夫（芸大と共演）
1980/12	この年より「チャリティ・コンサート」を盛岡市内のバロック音楽愛好家グループと共催（～1997）		
1981/07	「BACH ABEND」	カンタータ 195番、182番	指揮：小林道夫
1982/11	「バッハの夕べ」	カンタータ 158番、4番	指揮：佐々木正利
1985/03	J.S.バッハ生誕 300年記念演奏会	「ヨハネ受難曲」	指揮：佐々木正利
1985/11	仙台北教会宗教音楽の夕べ	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1985/11	G.F.ヘンデル生誕 300年記念演奏会	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1986/04	「宗教音楽の夕べ」	ドイツ・レクイエム(H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
1986/04	第1回ドイツ演奏旅行	ドイツ・レクイエム(H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
1986/07	「東京ゾリステン演奏会」共演	スターバト・マーテル(ペルゴレージ)	指揮：赤松 安
1987/03	創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」	カンタータ34番、70番、102番ほか	指揮：佐々木正利
1987/11	ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会「バロック音楽の夕べ」（主催）		
1988/03	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会	「ミサ曲口短調」	指揮：佐々木正利
1988/09	「今仲幸雄バリトンリサイタル」（主催）		
1988/11	「ミヒヤエル・ショッパーパーバリトンリサイタル」（主催）		
1989/04	「二重合唱の夕べ」	モテット2番、5番(J.S.バッハ)ほか	指揮：佐々木正利
1990/03	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会	クリスマス・オラトリオ4～6部ほか	指揮：佐々木正利
1990/10	「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」（主催）		
1990/12	第2回ドイツ演奏旅行	クリスマス・オラトリオほか	指揮：C.ポッペン、佐々木正利
1991/03	ドイツ演奏旅行帰国演奏会	モテット1、2番(J.S.バッハ)ほか	指揮：佐々木正利
1991/10	「カンタータ第140番、コーヒーカンタータ」	演奏会名と同曲	指揮：H.ヴィンシャーマン
1992/03	「バッハとメンデルスゾーンのカンタータの夕べ」	カンタータ93番ほか	指揮：佐々木正利
1993/10	「マタイ受難曲」（盛岡、仙台、岡山、東京）	マタイ受難曲(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン
1994/07	「カンタータ147番」仙台バッハアカデミーにおいて	カンタータ147番	指揮：佐々木正利
1994/12	弘前市民クリスマス：G.F.ヘンデル「メサイア」演奏会に出演		指揮：佐々木正利
1995/04	第3回ドイツ演奏旅行	天地創造(J.ハイドン)ほか	指揮：ヨセフ・ツィルヒ／佐々木正利
1995/08	一関・東日本合唱祭参加	モテット6番ほか	指揮：佐々木正利
1995/09	剣持清之・トリオフィオリーレ「モーツァルト室内楽の夕べ」（主催）		
1995/10	青山町教会チャペルコンサート	天地創造抜粋(J.ハイドン)ほか	指揮：小原一穂
1995/11	「天地創造」（盛岡、仙台）	指揮：岩城宏之	
1996/03	「バッハの夕べ」演奏会	カンタータ21、131番、モテット4番	指揮：佐々木正利
1997/04	20周年記念演奏会「昇天祭オラトリオ」「マニフィカト」ほか(J.S.バッハ)		指揮：H.J.ロッチュ、佐々木正利

1998/11	「ヴィンシャーマンのロ短調ミサ」演奏会	ミサ曲ロ短調(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン
1998/12	「盛岡いのちの電話」チャリティーコンサート	カンタータ151番、191番、讃美歌数曲	指揮：佐々木幹雄
1999/04	シュッツのダビデ詩篇とバッハ、メンデルスゾーンの前奏曲の夕べ		指揮：佐々木正利
1999/11	第4回ドイツ演奏旅行	ミサ曲ロ短調(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン
1999/11	ドイツ演奏旅行 ダビデ詩篇曲3曲(シュッツ)ほか		指揮：佐々木正利
1999/12	「盛岡いのちの電話」チャリティー・コンサート		指揮：佐々木正利
2000/11	クリスマス・オラトリオ全曲演奏会		指揮：H.ヴィンシャーマン
2001/03	「盛岡いのちの電話」開局10周年記念チャリティー・コンサート		指揮：佐々木正利
2001/08	関連団体ドイツ演奏旅行に有志参加	カンタータ39番、102番、158番 ほか	指揮：D.ティム
2001/10	クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会		
2002/01	25周年記念演奏会	モテットOp.29、74(ブラームス)ほか	指揮：佐々木正利
2002/10	ライブツィヒ・バロックオーケストラ演奏会	カンタータ45番 ほか	指揮：D.ティム
2002/12	鳴海真希子さん追悼演奏会	ヨハネ受難曲から第39、40曲	指揮：佐々木正利
2002/12	久慈・こはくのまち第九演奏会	交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)	指揮：石川善美
2003/11	マタイ受難曲演奏会盛岡公演	マタイ受難曲 (J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン
2003/12	マタイ受難曲演奏会東京公演		指揮：H.ヴィンシャーマン
2004/07	関連団体ドイツ演奏旅行に有志参加	カンタータ131番、21番	指揮：D.ティム
2005/01	マルコ受難曲演奏会	カンタータ106番、79番、105番	指揮：佐々木正利
2005/04	シュレスヴィヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団盛岡公演		指揮：佐々木正利、ロルフ・ベック
2005/12	第5回ドイツ演奏旅行	メサイア/ドイツ語版(ヘンデル)ほか	指揮：G.シュマルフス、
2007/01	ヨハネ受難曲演奏会 (30周年)	ヨハネ受難曲(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン
2007/06	飯靖子・佐々木正利ジョイントリサイタル (主催)		
2007/12	盛岡市民文化ホール開館10周年記念 マーラー「復活」演奏会		指揮：飯森範親
2007/12	台湾 長榮交響楽団：主催「クリスマス・オラトリオ」演奏会		指揮：G.シュマルフス
2008/06	珠玉のカンタータ 〜バッハからの贈り物〜	カンタータ18番、187番、78番、182番	指揮：佐々木正利
2008/12	スイス演奏旅行	マニフィカト(ブクステフーデ)ほか	指揮：佐々木正利
2010/01	リリング・ロ短調ミサ盛岡公演	ミサ曲ロ短調BWV232 (J.S.バッハ)	指揮：H.リリング
2010/10	花巻温泉チャペルコンサート		指揮：佐々木正利
2010/12	東フィル・第九演奏会	交響曲第9番「合唱」(ベートーヴェン)	指揮：D.エッティンガー
2011/06	東日本大震災の犠牲者に捧ぐモーツァルト・レクイエム演奏会		指揮：佐々木正利
2012/02	イタリア・バロックの煌めき (35周年) キリエ、クレド、マニフィカト (ヴィヴァルディ)ほか		指揮：佐々木正利
2013/01	バッハからの贈り物 珠玉のカンタータ Vol.2	カンタータ4番、93番、161番、102番	指揮：佐々木正利
2013/11	ピアノ2台の伴奏によるドイツ・レクイエム演奏会	ドイツ・レクイエム (J.ブラームス)	指揮：佐々木正利
2014/11	メンデルスゾーン作曲 オラトリオ「聖パウロ」演奏会		指揮：佐々木正利
2015/04	山形交響楽団 第1回 盛岡演奏会 「アマデウスへの旅」	レクイエム (モーツァルト)	指揮：飯森範親
2016/03	東日本大震災 心の復興祈念コンサート	ドイツ・レクイエム (J.ブラームス)	指揮：H.シェレンベルガー

※周年演奏会は太字になっています。

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティーコンサート、チャペルコンサート、合唱祭、新春コーラスコンサートなどに参加、出演しています。

会 員 募 集

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは、会員を募集しています。合唱が好きな方、年齢、経験問わず歓迎いたします。お気軽に見学にお出てください。

◆練習日時：毎週火曜日 午後6:30～9:00

毎月1回日曜日午後1:30～5:00

◆練習場所：内丸教会（毎週火曜日、日曜はその都度）

（盛岡中央郵便局から与の字橋方向へ、一つ目の信号手前右側角）

◆お問合せ：T E L 019-665-1614

F A X 019-665-1613

E-mail mail@mbkv.jp

W e b http://www.mbkv.jp/

演奏会実行委員会組織・協力企業一覧

役 割	氏 名	役 割	氏 名
チーフマネージャー	赤塚貴史	楽譜係	堀川佑也
サブマネージャー	佐藤和久	バックステージ	茂木容子
特別会計係	赤塚貴史／本田奏子	ステージマネージャー	稲葉正俊／田中雅史／佐々木幹雄
共演係	茂木容子／佐々木幹雄／赤塚貴史	フロント	鈴木勇二／佐々木聡子
チケット係	渡辺しをり／伊藤京花／小田島沙英	支払・精算	赤塚貴史／大石敦子
	渡辺信之（招待関係）	字幕	高橋聡／慶光院尚子／佐々木幹雄
印刷担当	柿崎倫史／芳賀志歩	レセプション	佐藤和久／柿崎倫史
情宣	田中雅史／柿崎倫史／渡辺しをり	渉外	渡辺しをり
Web対応	堀川佑也／柿崎倫史	アドバイザー	渡辺信之
プログラム広告	佐藤和久／茂木容子		

旅行手配	トラベルe旅.com	字幕	アルゴン社
デザイン	加藤デザイン事務所	印刷	三澤印刷
写真	カメラのキクヤ	録音	IBC開発センター
録画	畠山写真館		

内科クリニックすずき

◆診療時間◆

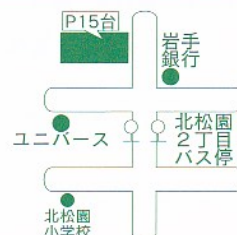
平 日/あさ9:30～
よる7:15
土曜日/あさ9:30～
よる5:15
木曜日/あさ9:30～
ひる1:10

日本内科学会認定内科専門医

■胃腸科 ■循環器科 ■アレルギー科 ■呼吸器科
■神経内科 ■心療内科 ■小児科 ■人間ドック

盛岡市北松園2-15-4（ユニバース隣）

☎ 019 (662) 2888





信頼の、さらにその先へ。

いわぎんは、
盛岡バッハ・カンタータ・
フエライン40周年
記念演奏会を通じて
「豊かなこころ」を
育みます。

地域とともに。

みどりの銀行のイーハトーヴ宣言

「みどりの銀行のイーハトーヴ宣言」とは…

地域のみなさまの心の中には、それぞれ思い描く「理想のいわて・東北」があると思います。私たちは、現実の「岩手・東北」のなかでその理想が少しでも形を成すことができるよう行動していきたいと考えています。

コーポレートカラーが「みどり」の岩手銀行が掲げた「みどりの銀行のイーハトーヴ宣言」にはそうした決意が込められています。

豊かなくらし

様々な金融サービスや商品などを通じて、当行の社会的使命でもある地域経済・産業の活性化を目指していきます。

豊かなしぜん

当行のコーポレートカラーである「みどり」に注目し、自然保護に取り組んでいきます。

豊かなこころ

協賛事業などを通じて、地域の人々、特に若い世代の「こころ」を育むなど、地域の人づくり活動に取り組んでいきます。

岩手銀行

<https://www.iwatebank.co.jp>

20 Mar. 2017

盛岡市民文化ホール(マリオス)大ホール